



## 序

学 長 佐 々 木 博

富山医科薬科大学は、平成7年10月1日をもって開学20周年を迎えることになりました。一県一医科大学の構想のもとに、15医学部あるいは医科大学が新設されましたが、本学は国立としては唯一の医科薬科大学として昭和50年10月1日に開学致しました。この間富山大学より移行されました薬学部、和漢薬研究所は、それぞれ平成4年、平成5年現在創立100年、30年の歴史を持ち、新設の医学部、大学直属の附属病院（昭和54年10月開院）と共に4部局構成のもとに発足しました。

この度、いわば成人式を迎えるにあたり、開学20周年記念事業として、10月13日に記念講演会、記念式典、記念祝賀会を開催するとともに、本誌の発行、記念植樹、校歌・応援歌の制定、県民を対象とするシンポジウム、公開講座の諸事業を挙行了したところであります。

すでに昭和60年10月に開学10周年記念事業が行われ、創設期の多くの困難を克服しつつ希望に満ちた10年間の歴史を、その際発行された記念誌に読み取ることが出来、その後の10年を振り返り、感慨新たなものがあります。

本年3月8日に举行された平成6年度卒業式では、医学部は第14期生、薬学部は16期生を世に送り、開学以来医学部1,348名、薬学部1,512名が卒業し、この間博士（医学）は356名（うち課程修了者156名）、修士（薬学）は491名、博士（薬学）は162名（うち課程修了者80名）に授与されました。これらの卒業生、学位取得者はすでに中堅的な研究者、医師、薬剤師等として、各界で活躍しています。とくに医学部基礎系では3名が助教授、附属病院では12名が講師に昇任しているほか、講座教官の半数以上は本学卒業生が占め、教育・研究・診療の重要な担い手として活躍しております。

この10年間に組織、講座の新設、改組も著しく進展して来ました。医学部では放射線基礎医学講座の新設のほか、附属病院中央診療施設より歯科口腔外科、臨床検査部、和漢診療部が講座化されました。薬学部では平成3年に従来の6講座を、薬剤薬理学、臨床分析

学、医薬品化学、衛生・生物化学、薬用資源学、薬剤設計学、薬物生理学の7大講座、14研究室に改組し、両学部教育・研究面での一層の充実が図られて来ました。また和漢薬研究所では5部門に加えて、昭和62年以来高次神経機能制御、免疫機能制御、細胞資源工学の3部門が10年の時限立法で増設され、研究面での充実と共に外国人留学生を含む大学院生、研究生の積極的な受け入れを進めて来ています。

附属病院では院内措置により数部門の特殊診療施設が開院以来設置されて来ましたが、救急部、輸血部、集中治療部の設置が相次いで予算化され、中央診療施設化されました。さらに平成6年7月1日より特定機能病院の認可をうけ、紹介患者制の確立を目標としつつ、高度医療の提供と開発、専門医の養成等、県内で中核的な医育・医療施設としての基盤を構築しつつあります。

また、医薬分業は近年厚生省が積極的に推進する方針にあり、本院でも薬剤部長から、かねがね強い要望がありましたが、調剤薬局等受皿の問題の解決と、診療科のコンセンサスを得るために時間を要し、平成5年11月よりスタートしました。院外処方発行率は現在約40%で、薬剤師の病棟業務への全面的な参入目標である50%のラインは近く達成されると思われます。院外処方の発行にあたっては患者サービスの低下を招かない様細心の配慮がされ、待ち時間の短縮、また病棟業務による服薬指導、副作用モニタリング、点滴薬の調合等、薬剤師本来の業務の遂行と医療の質的向上に寄与すると考えられます。

この間、県・市医師会への積極的な参画と協力に努め、また本学卒業生の県内外における公的・私的病院への医師派遣を積極的に推進し、その成果が次第に実りつつあります。

さらに平成5年度に新設医科大学として初めて看護学科が医学部に設置され、本年度には3年次生編入試験も実施されました。平成9年度の概算要求最重要事項として、看護学研究科修士課程の設置を要望するため、全教官が現在鋭意努力しております。将来的には修士課程修了者は専門看護職認定資格を取得し、資格取得後はそれぞれの専門看護婦として医療現場に参入し、医師の良きパートナーとして診療レベルと患者サービスの向上に貢献するものと期待されます。

平成7年度の概算要求の新規組織としては、遺伝子実験施設が承認されました。本施設は遺伝子解析、遺伝子診断および治療を研究の主体とする目的で設置されましたが、県内大学、研究所、企業とも交流、協力しつつ、現在急速に進歩しつつある遺伝子レベルの基礎的研究と応用の進展が期待されます。

附属病院では、開院以来、院内措置で医療情報部が設置され、当初医事業務を主体とし

て来ましたが、予算の増額による電算機機能のバージョン・アップに伴い、ソフト面でオーダーシステム（外来予約、処方、諸検査、入院予約、給食等）が次第に完備し全国的にもトップレベルにあります。この様な背景から平成7年度に医療情報部が予算化されましたが、他方学内LANが整備されつつあり、将来的には医薬総合情報処理センター（仮称）の設置により、学内・外、さらにグローバルなレベルにおける研究、教育、医療面で寄与したいと考えています。

施設・設備面でもこの10年間で次第に充実して来ましたが、前者については国際交流会館、看護学科研究棟（第1期工事）が竣工し、附属病院外来棟、医学部臨床研究棟、和漢薬研究所、薬学研究資料館が増築されました。また平成6～7年度にかけて看護学科研究棟（第2期工事）、医・薬研究棟の増築が予算化されています。

近年大学が開かれた機関として対応することが要望され、その一つに国際交流があります。すでに昭和60年5月に瀋陽薬科大学（前瀋陽薬学院）との学術交流協定が締結され、その後中日友好医院、中国中医研究院とも協定が結ばれました。

国際学会、シンポジウム等に関しては、日中和漢薬シンポジウムが昭和60年に第1回が富山で開催されて以来、隔年毎に富山と北京で交互に開かれ、本年10月にも第5回シンポジウムが当地で開催されました。そのほか伝統医薬シンポジウムが平成4年以来毎年開かれ、また第6回国際環境複合影響会議、国際シンポジウム「認知・記憶の脳内機構：ニューロンから行動まで」が開催され、本年7月にも国際シンポジウム「知覚、記憶、情動の脳内機構：神経科学の最前線」が開催されました。

一方外国人留学生は年々増加し、本年4月1日現在では中国、韓国、東南アジア諸国から45名を受け入れており、外国人客員研究員制度による中堅クラスの外国人研究者の受け入れも盛んに行われ、また昭和63年に和漢薬研究所に新設された免疫機能制御部門では、任期1年の外国人客員教授を採用して来しました。本学にはすでに国際交流会館が設置されていますが、現在では不足し、増築、学外協力を含む居住施設の確保が急務となっています。

国際協力事業団（JICA）の計画による、サンパウロ州立のカンピーナス大学における「消化器病センター」のプロジェクトは本年すでに5年目を迎え、琉球大学病理部の協力も得て、チームリーダー、消化器内科医、外科医、病理関係者が交替で常駐し、一方カウンターパートとしてカンピーナス大学より研修医が来学し、内視鏡を主体とする消化器病の診断、治療の技術移転を行って来しました。同センターの技術レベルは飛躍的に向上

し、ブラジル国内のみでなく、南米諸国からも消化器病医師が同センターでの研修に参加し、南米随一の消化器病センターとして成長しつつある現状です。

地域社会に対してはリフレッシュ教育、公開講座等を通じて企業研究者、県民を対象にした生涯教育の機会を提供し、各部局教官が積極的に協力しています。学会関係も地方会のみでなく、全国学会の開催も次第に増え（第6章参照）、県内の医療レベルの向上、医学・薬学教育にも積極的に貢献して来ています。

この10年間の本学の概要を述べて来ました。顧みますと創設以来20年間の本学の発展のためには文部省はじめ中央諸官庁、富山県、富山市、県内各市町村、富山医科薬科大学協力会、県・市医師会、関連教育病院、富山県善意銀行、富山県しらゆり会、医学部・薬学部同窓会、医学部後援会、その他多くの関係団体および各位の御支援と御協力をいただいで来ました。ここにあらためて深甚の謝意を表します。

また創設時代に多くの御苦勞を担われ、本学の基盤を作られた初代の故平松博学長、小林收病院長、山崎高應副学長、およびその後の本学の発展に多大の御貢献をいただいた佐々學元学長、山崎高應前学長、熊谷朗前病院長、小澤光元副学長、増田克忠元副学長、田辺正英前副学長、ならびに教職員の先輩諸兄姉に衷心より感謝致す次第です。

いま大学および医療は大きな変革期に差し加かっており、点検・評価を通じて、中・長期的展望の構築が要望されています。この点については別項の「点検評価と将来の展望」でも触れますが、上述の看護学科の新設に伴い、本学は医・薬・看の医療の三本柱を基盤とする教育・研究・医療機関の中核的存在として新しい使命と展望を担う事は明白であります。開学20周年を契機に、「本学の真価が問われるのは、まさにこれからである」との共通の認識を新たにして、関係各位の御期待に沿うべく、全学の教職員共々一層の努力を重ねて参る所存です。皆様方の今後とも変わらない御支援、御協力と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

おわりに、本記念誌の編集にあたり、御執筆いただいた各位、小泉保編集委員長、本田昂前編集委員長ならびに編集委員の方々の御協力、御尽力に深謝いたします。